都留文科大学大学院紀要　第27集（2023年３月）
THE TSURU UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL REVIEW,
No.27（March, 2023）

万葉集最終正月一日の永遠の吉事祈願の歌

On The Poem of New Year's Day in The Last of The MANYŌ-SHŪ, Praying Happy and Good Things Eternally

鈴木　武晴
Takeharu SUZUKI

一、解釈上の二説

万葉集の最後に置かれている歌は、次の歌である。

三年の春の正月一日に、因幡の国の庁にして、饗を国郡の司等に賜ふ宴の歌一首

新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事（巻二十・四五一六番歌）

右の一首は、守大伴宿禰家持作る。

天平宝字三年（七五九）の正月一日に、因幡の国（鳥取県東部）の庁（鳥取市に存した役所）における、国や郡の司等（役人たち）に賜うた宴の場で、国守大伴家持が詠んだ歌である。

この歌の解釈については、二つの説が行われている。

第一説は通説で、第四句「今日降る雪の」までを第五句の「いや重け」を起こす実景の序詞と捉え、「……今日降る雪のように、いよいよ重なれ、吉き事が。」と解する。

これに対して第二説は非序詞説で、「雪＝吉事」の「いや重け」と解する説である。この説を提出する鈴木日出男氏は、

「雪」と「吉事」をいう二重の文脈はあくまでも対等の関係であり、

「いや重け」の二重文脈は、異義の二語を重層させているのではないから掛詞でもなく・・・序詞を導く語法でもない。

と述べている（「天平宝字三年正月一日の歌」『万葉集を学ぶ第八集』所収、昭和五十三年十二月二十五日、有斐閣発行）。

これを承けて、『萬葉集釋注十』（一九九八年十二月二十日、集英社発行）の四五一六番歌「釋文」には、次のように記している。

上からは「今日降る雪よ、この雪のいやしけ」という関係になり、その「いやしけ」は「吉事」にかかわり、「吉事よいやしけ」というのが結句の意であるから、「雪」と「吉事」とは等質の物ということになる。家持の眼前に降りしきるめでたい「雪」そのものが家持の願望する「吉事」そのものとして降り積もっているのである。だから、「いやしけ吉事」は未来に及ぶことでありながら、眼の前に今実現しつつある。これは予祝の断定といってよいだろう。

以下、この解釈上の問題を解くことを第一の目的とし、その解明の上で、万葉集最終の正月一日吉事祈願の歌の文学的文化的意義について考察したいと思う。

二、瑞兆としての「降る雪」

上記の二説のうち、第二説には問題点が認められる。それは、「降る雪」を「吉事」そのものと捉えている点である。

当面の四五一六番歌と響き合う巻十七冒頭部天平十八年（七四六）正月肆宴応詔歌群（三九二二～三九二六番歌）の葛井連諸会（ふぢゐのむらじもろあひ）の

新（あらた）しき年の始めに豊（とよ）の年（し）しるすとならし雪の降れるは　（三九二五）

に、正月の雪が豊の年を予祝するめでたい前兆として詠まれていることが参考になる。当面歌の「降る雪」は「吉事」そのものではなく、「吉事」をもたらすめでたい前兆と捉えるべきである。「吉事」という言葉は、右の歌の「豊」の事（五穀豊穣）を中心としながら、めでたくよい事一般をいうのであろう。そのことは、原文「餘（余）其騰」の表記の考察によって明らかになる。

歌の漢字かな交り書き下し文では、通常「吉事」と記しているけれども、原文表記は「餘（余）其騰」。万葉集中の次の用字例から、「餘（余）其騰」の「餘（余）」に「吉」の字を当てることは妥当と言える。

ａあをによし奈良の大道（おほち）は行（ゆ）き余家〈よけ〉ど・・・（巻

十五・三七二八番歌）

……白真弓張りて懸けたり夜道は将吉〈よけ〉む（巻三・二八九番歌）

b……立あざり我祈ひ禱めど　しましくも余家〈よけ〉くはなしに……（巻五・九〇四番歌）

……筑波嶺の吉〈よけ〉くを見れば……（巻九・一七五七番歌）

c……咲く花を折りも折らずも見らくし余志〈よし〉も（巻十九・四一六七番歌）

……音のみに聞きし我妹を見らくし吉〈よし〉も

（巻八・一六六〇番歌）

当面四五一六番歌の原文「餘（余）其騰」の「餘（余）」は、ク活用形容詞「よし」の語幹「よ」の万葉仮名音仮名表記で、形状言として、よい状態、よいさまを表す（『時代別国語大辞典　上代編』（一九六七年十二月十日、三省堂発行）。右の挙例の原文「余」も「吉」も、文脈上「良い（善い）」の意を表す箇所に用いられている。上掲『時代別国語大辞典　上代編』の「よごと〔善事〕（名）」の項には、

よいこと。めでたいこと。悪事の対。

とあり、当面歌の「余其騰」の例と、『古事記』雄略天皇条の、

吾者雖二悪事一而一言、雖二善事一而一言ニテ、言離之神、葛城之一言主大神者也

の「善事」の例が挙げられている。大伴家持自身も、万葉集巻十八の「陸奥の国に金を出だす詔書を賀く歌一首幷せて短歌」（四〇九四～四〇九七番歌）の長歌四〇九四に「……しかれども我ご大君の諸人を誘ひたまひ　善き事（原文「善事」、具体的には大仏建立をいう）を始めたまひて……」と用いていることを指摘したい。

万葉集中において唯一人大伴家持が『古事記』雄略天皇条の物語に用いられている「善事」を用いていることは、偶然ではなかろう。家持が敬意を表する雄略天皇（本稿第五節参照）の条の言葉として意図的に応用したものと考えられる。それゆえ、この「善事」は、四五一六番歌の原文「餘（余）其騰」にも適用させて考えることが、家持の表現意図に即すると思われる。

以上のことから、当面歌の原文「餘（余）其騰」は「吉（善）事」で、「豊」（五穀豊穣）の事をはじめとするめでたくよい事全般を表す言葉と捉えることができよう。

『日本書紀』天武天皇五年（六七六）四月四日条の、

倭国の添下郡の鰐積吉事、瑞鶏を貢れり。

という記事に見る「吉事」の人名も、めでたくよい事の意で付けられた名であろう。

以上の考察から、「雪＝吉事」と捉えて、降る雪の吉事いやしけと解する第二説は、用例の保証なく、家持の表現意図に即さないと言える。

第一説の通説のように、上四句までを序詞と捉え、「新しい年の始めの初春の今日降る雪のように、いよいよ重なれ、吉〈善〉い事（めでたくよい事）が。」の意と解するのが妥当と考えられる。

三、降る雪のいや重け吉（善）事

第一説の通説が妥当である理由をさらに具体的に述べよう。

Ⅰ「降る雪の」の序詞例

当面歌四五一六と同様、「…降る雪の」の表現が序詞として用いられている例は万葉集中に六例あり、次のとおり。

1我がやどの君待つの木に降る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ（巻六・一〇四一番歌、「十六年甲申の春の正月の五日に、諸卿大夫、安倍虫麻呂朝臣が家に集ひて宴する歌一首　作者審らかにあらず」上三句が序で「行き」を起こす）

2高山の菅の葉しのぎ降る雪の消ぬと言ふべくも恋の繁けく（巻八・一六五五番歌、「三国真人人足が歌一首」上三句が序で「消ぬ」を起こす）

3梅の花それとも見えず降る雪のいちしろけむな間使遣らば（巻十・二三四四番歌、上三句が序で「いちしろけむ」を起こす）

4海人小舟泊瀬の山に降る雪の日長く恋ひし君が音ぞする（巻十・二三四七番歌、上三句が序で「日」〈消〉を起こす）

5和射見の嶺行き過ぎて降る雪のいとひもなしと申せその子に（巻十・二三四八番歌、上三句が序で「いとひ」を起こす。第五句に命令形「申せ」）

6上つ毛野伊香保の嶺ろに降ろ雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり（巻十四・三四二三番歌、上三句が序で「行き」を起こす）

この他に、当面歌四五一六と響き合う巻十七冒頭部天平十八年正月肆宴応詔歌群の左大臣橘諸兄の、

降る雪の白髪までに大君に仕へまつれば貴くもあるか　（三九二二番歌）

の実景的枕詞の「降る雪の」の用法（「白」に懸かる）を家持は十分に考慮したであろう。

Ⅱ「いや重け吉事」の「いや……」の例

万葉集中の、「――の」の序詞が「いや――」を起こす例は十一例ほどある。次のとおり。

a みもろの神なび山に　五百枝さし繁に生ひたる　栂の木のいや継ぎ継ぎに　玉葛絶ゆることなく　ありつつもやまず通はむ　明日香の古き都は……（巻三・三二四番歌、「神岳に登りて、山部宿禰赤人が作る歌一首幷せて短歌」の長歌。第五句までが序で「いや継ぎ継ぎに」を起こす）

b 葦辺より満ち来る潮のいや増しに思へか君が忘れかねつる（巻四・六一七番歌、「山口女王、大伴宿禰家持に贈る歌五首」の第五首。上二句が序で「いや増しに」を起こす）

c 滝の上の三船の山に　瑞枝さし繁に生ひたる　栂の木のいや継ぎ継ぎに　万代にかくし知らさむ　み吉野の秋津の宮は

…（巻六・九〇七番歌、「養老七年癸亥の夏の五月に、吉野の離宮に幸す時に、笠朝臣金村が作る歌一首幷せて短歌」の長歌。第五句までが序で「いや継ぎ継ぎに」を起こす）

d我が背子が浜行く風のいや早に急事増して逢はずてあるらむ（巻十一・二四五九番歌、上二句が序で「いや早に」を起こす）

e港みに満ち来る潮のいや増しに恋はあまれど忘らえぬかも（巻十一・二二五九番歌、上二句が序で「いや増しに」を起こす）

f娘子らが麻笥に垂れたる　続麻なす長門の浦に　朝なぎに満ち来る潮の　夕なぎに寄せ来る波の　その潮のいやますますに　その波のいやしくしくに　我妹子に恋ひつつ来れば…（巻十三・三二四三番歌。第五句「朝なぎに」～第九句「その潮の」・第十一句「その波の」が序で、それぞれ「いやますますに」「いやしくしくに」を起こす）

g…潮なぎに寄する白波　夕なぎに満ち来る潮の　いや増しに絶ゆることなく　いにしへゆ今のをつつに　かくしこそ見る人ごとに　懸けて偲はめ（巻十七・三九八五番歌、大伴家持「二上山の賦一首」の長歌。第十九句「朝なぎに」～第二十二句「満ち来る潮の」までが序で、「いや増しに」を起こす）

h沖辺より満ち来る潮のいや増しに我が思ふ君が御船かもかれ（巻十八・四〇四五番歌、大伴家持「（天平二十年三月）二十五日に、布勢の水海に往くに、道中、馬の上にして口号ぶ二首」の第二首。上二句が序で「いや増しに」を起こす）

i常世物この橘のいや照りに我ご大君は今も見るごと（巻十八・四〇六三番歌、大伴家持「後に橘の歌に追ひて和ふる二首」の第一首。上二句が序で「いや照りに」を起こす）

j…射水川雪消溢りて　行く水のいや増しにのみ…（巻十八・四一一六番歌、朝集使の任終えて本任に還った掾久米朝臣広縄を慰労する「詩酒の宴」における大伴家持作。「射水川」～「行く水の」までが序で、「いや増しに」を起こす）

kあしひきの八つ峰の上の　栂の木のいや継ぎ継ぎに　松が根の絶ゆることなく　あをによし奈良の都に　万代に国知らさむと…（巻十九・四二六六番歌、大伴家持「詔に応ふるために、儲けて作る歌一首幷せて短歌」の長歌。上三句が序で「いや継ぎ継ぎに」を起こす）

右のような「――の」の序詞以外の序詞＋「いや～」の表現は次のとおり。

l遠山に霞たなびきいや遠に妹が目見ねば我恋ひにけり（巻十一・二四二六番歌、上二句が序で「いや遠に」を起こす）

m渋谿の崎の荒磯に寄する波いやしくしくにいにしへ思ほゆ（巻十七・三九八六番歌、大伴家持「二上山の賦一首」第一短歌。上三句が序で「いやしくしくに」を起こす）

n暁に名告り鳴くなるほととぎすいやめづらしく思ほゆるかも（巻十八・四〇八四番歌、大伴家持「別に所心一首」。上三句が序で「いやめづらしく」を起こす）

o東風をいたみ奈呉の浦廻に寄する波いや千重しきに恋ひわたるかも（巻十九・四二一三番歌、大伴家持「右の一首は、京の丹比家に贈る」。上三句が序で「いや千重しきに」を起こす）

p霜の上に霰た走りいや増しに我は参ゐ来む年の緒長く古今未詳

（巻二十・四二九八番歌、「六年の正月の四日に、氏族の人等、少納言大伴宿禰家持が宅に賀き集ひて宴飲する歌三首」の第一首。作者は左兵衛督大伴宿禰千室。上二句が序で「いや増しに」を起こす）

「――のいや～に」の表現の後には、a「玉葛絶ゆることなくありつつもやまず通はむ」、c「万代にかくし知らさむ」、g「絶ゆることなく」、i「我ご大君は今も見るごと」、k「松が根の絶ゆることなく　あをによし奈良の都に　万代に国知らさむと」などのように、永遠性を希求する表現が続いていることが、当面歌四五一六の「いや重け吉事」と関わって注目される。

また、dの例は、「――浜行く風のいや早に急事増して」と「いや――」の後に「事」が用いられている。四五一六の「今日降る雪のいや重け吉事」と共通しており、注目される。

補足例のpの四二九八番歌は、天平勝宝六年（七五四）正月四日の歌である。上二句の序「霜の上に霰た走り」は当面歌四五一六と同じく天象による序で、「いや増しに」を起こす。それに「我は参ゐ来む年の緒長く」という永遠性を希求する表現が続いている。

Ⅲ「いやしくしくに」「いや千重しきに」「いやしく」「いやしけ」の例

fの例に度重なる意の「しく」を重ねた「その波のいやしくしくに」、補足のmの家持歌の例にも「…寄する波いやしくしくに」とあり、oの家持歌に「…寄する波いや千重しきに」と、「幾重にも重ねて」の意の「いや千重しきに」が用いられていることが、当面歌の「いや重け」と関わって注視される。

「いや重く」の例は当面歌四五一六を入れて五例。すべて大伴家持歌であることを指摘したい。

①春の雨はいやしき降るに梅の花いまだ咲かなくいと若みかも（巻四・七八六番歌、「大伴宿禰家持、藤原朝臣久須麻呂に報へ贈る歌三首」の第一首）

②我が背子が琴取るなへに常人の言ふ嘆きしもいやしき増すも（巻十八・四一三五番歌、左注に「右の一首は、少目秦伊美吉石竹の館の宴にして守大伴宿禰家持作る。」）

③…うら悲し春し過ぐれば　ほととぎすいやしき鳴きぬ…（巻十九・四一七七番歌、「感旧の意に勝へずして懐を述ぶる一首幷せて短歌」の長歌）

④鳴く鶏はいやしき鳴けど降る雪の千重に積めこそ我が立ちかてね（巻十九・四二三四番歌、天平勝宝三年〈七五一〉正月三日作）

①は天象の「春の雨」に「いやしき降る」が用いられており、④は正月三日の歌で、一首中に「いやしき」と「降る雪の千重に積めこそ」の表現が用いられていて注目される。この歌の詠まれた前日の正月二日には、家持の次の歌が詠まれている。

新しき年の初めはいや年に雪踏み平し常かくにもが
（巻十九・四二二九番歌）

右の一首の歌は、正月の二日に、守が館に集宴す。時に、

降る雪ことに多にして、積みて四尺有り。すなはち、主人大伴宿禰家持この歌を作る。

この歌は、「新しい年の初めは、来る年来る年、雪を踏み平して、いつもこのように賑々しくありたい。」の意。今年のみならず、未来に渡っての願望を述べており、「いや重け吉（善）事」と命令形をもって未来へ向かって強く祈願する当面歌を喚起する要素を持つ歌と言える。

Ⅳ「降りしけ」の例

万葉集中に、「いやしけ」という命令形は当面歌のみであるけれども、「降りしけ」の命令形は四例ある。次のとおり。

1ひさかたの雨は降りしけ思ふ子がやどに今夜は明かして行かむ（巻六・一〇四〇番歌、「安積親王、左少弁藤原八束朝臣が家にして宴する日に、内舎人大伴宿禰家持が作る歌一首」）

2池の辺の松の末葉に降る雪は五百重降りしけ明日さへも見む（巻八・一六五〇番歌、「西の池の辺に御在して、肆宴したまふときの歌一首」、作者未詳、豎子安倍朝臣虫麻呂伝誦）

3沫雪は千重に降りしけ恋ひしくの日長き我は見つつ偲はむ（巻十・二三三四番歌、柿本朝臣人麻呂歌集所出）

4初雪は千重に降りしけ恋ひしくの多かる我は見つつ偲はむ（巻二十・四四七五番歌、「（天平勝宝八歳〈七五六〉十一月）二十三日に、式部少丞大伴宿禰池主が宅に集ひて飲宴する歌二首」の第一首・「しけ」の原文「之家」は当面歌と共通）

1が家持歌の例。3の柿本人麻呂歌集の例が最初で、1・2・4の歌にはその影響が認められる。2に「五百重降りしけ」、3・4に「千重に降りしけ」とあることも、当面の四五一六番歌の「いやしけ」と深くかかわる。四例は四五一六番歌の「今日降る雪のいやしけ」の表現形成に作用していると言えよう。注意しなければならないのは、四例は波線と傍線で示したように、「ひさかたの雨は」「降る雪は」「沫雪は」「初雪は」――「降りしけ」となっていて、四五一六番歌の「降る雪のいやしけ」と異なっている点である。これは、主語―述語の関係と、「――の」の序詞とそれが起こす言葉の関係との違いを示していると考えられる。

Ⅴ上四句が序詞の例

万葉集中に、四五一六番歌のように、上四句が序詞で第五句の表現を起こす例に、次の歌がある。

ぬばたまの黒髪山の山菅に小雨降りしきしくしく思ほゆ（巻十一・二四五六番歌）

伊勢の海女の朝な夕なに潜くといふ鰒の貝の片思にして（巻十一・二七九八番歌）

Ⅵ序詞に「の」の音が四つ以上有って「いや――」の表現につづく例

四五一六番歌のように、序詞の中に「の」の音が四つ以上あって「いや――」の表現につづく例は、万葉集中に次のような例がある。

滝の上の三船の山に　瑞枝さし繁に生ひたる　栂の木のいや

継ぎ継ぎに…（巻六・九〇七番歌、「養老七年 癸亥の夏の五月に、吉野の離宮に幸す時に、笠朝臣金村が作る歌一首 并せて短歌」の長歌）

あしひきの八つ峰の上の　栂の木のいや継ぎ継ぎに…（巻十九・四二六六番歌、大伴家持「詔に応ふるために、儲けて作る歌一首 并せて短歌」の長歌）

家持歌四二六六の例は、笠金村の吉野讃歌の九〇七番歌の用法を踏まえた例である。この歌例の用法を当面歌四五一六に応用したものと見られる。

Ⅷ序詞に「の」の音が四つ以上有る例

Ⅵの例の他に序詞に「の」の音が四つ以上有る歌は次のとおり。

1 埴安の池の堤の隠り沼のゆくへを知らに舎人は惑ふ（巻二・二〇一番歌）

2 滝の上の三船の山に居る雲の常にあらむと我が思はなくに（巻三・二四二番歌、「弓削皇子、吉野に遊す時の御歌一首」）

3 水鳥の鴨の羽色の春山のおほつかなくも思ほゆるかも（巻八・一四五一番歌、「笠女郎、大伴家持に贈る歌一首」）

以下、歌番号のみ挙げる。巻八・一五〇一番歌、巻十・一九八八番歌、二二六三番歌、巻十一・二六四六番歌、二七八〇番歌、巻十二・三〇七六番歌、巻十四・三三六五番歌、三三七〇番歌など。

家持は第３例一四五一番歌の影響をうけて、天平宝字二年（七五八）の正月七日の侍宴のための次の預作歌を詠んでいる。

水鳥の鴨の羽色の青馬を今日見る人は限りなしといふ（四四九四番歌）

この歌は、正月三日に家持が詠んだ

初春の初子の今日の玉箒手に取るからに揺らく玉の緒（四四九三番歌）

という歌とともに、当面の四五一六番歌の「新しき年の始めの初春の今日降る雪の」という序詞のリズムにつながってゆく。この意味で、笠女郎の一四五一番歌の序詞の「の」によるリズムはきわめて重要である。

Ⅷ序詞のある歌の第五句を「――が」と訳すことができる名詞（体言）で歌い収める例

四五一六番歌の「いや重け吉（善）事」（いよいよ重なれ、めでたくよい事が、の意）のように、序詞を持つ歌の第五句を「――が」と訳すことができる名詞（体言）で歌い収める例として、次のような歌を挙げることができる（A・Cが家持歌、Bが橘諸兄歌）。

A 白波の寄する磯廻を漕ぐ舟の楫取る間なく思ほえし君（巻十七・三九六一番歌、大伴家持「相歓ぶる歌二首」の第二首。天平十八年十一月。上三句が序で「楫取る間なく」を起こす。下二句は「絶え間なく思われてなりませんでしたあなたのことが」の意）

B高山の巌に生ふる菅の根のねもころごろに降り置く白雪（巻二十・四四五四番歌、「（天平勝宝七歳）十一月の二十八日に、左大臣、兵部卿橘奈良麻呂朝臣が宅に集ひて宴する歌一首」、左大臣橘諸兄作。下二句は「ねんごろに隅々まで降り置いている白雪が。」の意）

Cあしひきの八つ峰の椿つらつらに見とも飽かめや植ゑてける君（巻二十・四四八一番歌、「（天平勝宝八歳）三月の四日に、兵部大丞大原真人今城が宅にして宴する歌一首」兵部少輔大伴家持作。上二句が序で「つらつらに」を起こす。下三句は「つらつらと入念に拝見しても見飽きることはありません、椿を移し植えられたあなたのことが。」の意）

以上の考察によって、再言するけれども、当面歌四五一六は通説のように第四句「降る雪の」までが序詞で、「いやしけ」を起こし、「いやしけ吉（善）事」と命令形によって未来に向かって吉（善）事の継起を祈願する歌と解せられるのである。

以下、拙著『テーマ別万葉集』（二〇〇一年二月二十五日、おうふう発行）の第一章と第十五章の脚注を下地としながら、表現の面から当面歌について、詳細にまとめておきたい。

「新しき年の始め」の表現は、先掲巻十七・三九二五番歌と主に響き合い、先掲巻十九・四二二九番歌とも響き合っている。「初春の今日」の表現は、先掲天平宝字二年（七五八）の正月三日に家持自身が詠んだ巻二十・四四九三番歌の上二句「初春の初子の今日の」を踏まえる表現。「今日」は永遠の深みをもった今日である。「降る雪の」の「雪」は言うまでもなく初雪であり、前年の橘奈良麻呂事件などの悲しみを鎮めるように、そして未来への希望のように、音もなく清らかに降り積もる。初句から「降る雪の」までが実景の序で「いや重け」を起こし、その命令形によって祈願の対象である「吉（善）事」を強く提示する。上述のように、ここには橘諸兄の巻十七・三九二二番歌の「降る雪の白髪までに」の実景的枕詞「降る雪の」の用法が顧慮されていよう。また、先掲「降りしけ」の歌例も脳裏に刻まれてあったであろう。

正月一日の歌は、万葉集中に当面歌四五一六のみ。正月一日という一年の始まりの日の歌で意図的に万葉集を閉じることによって、時間と思いの永遠性が生み出される。閉じられると同時に開かれる（始まる）のである。

家持は天平宝字三年（七五九）の正月一日に当歌を詠んだ時には、その一年、吉（善）き事が継起することを祈願する歌であったけれども、この歌が万葉集の編纂の観点から家持自身によって万葉集の最後に置かれた時、天平宝字三年（七五九）という一年の枠がはずれ、来る年来る年の正月一日に吉事を祈願する永遠の元日詠となったのである。巡り来る年々の永遠の「一年サイクル」の最初の日の正月一日に再生し、日本と日本人の吉事を祈願する歌となったのである。当歌は永遠の時空とリンクする元日吉事祈願の歌なのである。

家持は天平勝宝二年（七五〇）の正月二日に、越中国で次のような千年寿歌を詠んでいる。

天平勝宝二年の正月の二日に、国庁にして饗を諸の郡司等に給ふ宴の歌一首

あしひきの山の木末のほよ取りてかざしつらくは千年寿くとぞ（巻十八・四一三六番歌）

右の一首は、守大伴宿禰家持作る。

題詞は因幡国での当面歌四五一六とよく似る。左注の記載はまったく同じである（ただし、「守」の内容は越中国守と因幡国守の相違あり）。この歌は家持が四五一六の題詞・左注の記載の折に参照した歌と思われる。木の梢のほよ（落葉高木にやどる常緑小低木）を通して千年長寿を願った歌である。これに対して四五一六番歌は、有限（無常）の「雪」から無限（永遠）を創造し、「万葉」（万代。永遠。「葉」は「代（世）」の意）の吉事を祈願したのである。

家持は最初の原撰万葉集五十三首本（巻一・一～五三番歌）に付けられ、二十巻全体の名となっていた『万葉集』という名をしかと意識し、四五一六番歌を最後に置いて、万葉集を未来につなげたのである。

四、永遠とリンクするつなぎの手法

正月一日の四五一六番歌によって万葉集を閉じかつ開くという手法、四五一六番歌によって万葉集が巡り来る年々のそのサイクルの永遠の時空間とリンクするという手法を、家持はどのようにして獲得したのか。

思うに、その手法を、家持の父大伴旅人の「讃酒歌十三首」（巻三・三三八～三五〇番歌）の歌のつなぎの手法や、原撰万葉集五十三首本（巻一・一～五三番歌）における各天皇の宮の時代の歌のつなぎ歌の手法などに拠って獲得したものと考えられる。

a 讃酒歌の歌のつなぎの手法

讃酒歌十三首の歌のつなぎ手法を見てみよう。

大宰帥大伴卿、酒を讃むる歌十三首

1 験なきものを思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし（三三八番歌）

2 酒の名を聖と負せしいにしへの大き聖の言の宜しさ（三三九）

3 いにしへの七の賢しき人たちも欲りせしものは酒にしあるらし（三四〇）

4 賢しみと物言ふよりは酒飲みて酔ひ泣きするしまさりたるらし（三四一）

5 言はむすべ為むすべ知らず極まりて貴きものは酒にしあるらし（三四二）

6 なかなかに人とあらずは酒壺になりにてしかも酒に染みなむ（三四三）

7 あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見ば猿にかも似む（三四四）

8 価なき宝といふとも一坏の濁れる酒にあにまさめやも（三四五）

9 夜光る玉といふとも酒飲みて心を遣るにあに及かめやも（三四六）

10 世間の遊びの道に楽しきは酔ひ泣きするにあるべかるらし（三四七）

11 この世にし楽しくあらば来む世には虫に鳥にも我はなりなむ（三四八）

12生ける者遂にも死ぬるものにあればこの世にある間は楽しくをあらな（三四九）
13黙居りて賢しらするは酒飲みて酔ひ泣きするにしかずけり（三五〇）

右十三首の構造については、先師伊藤博氏が「『讃酒歌』の構造」（『萬葉集の表現と方法上』第二章第一節二、昭和五十年十一月二十日、塙書房発行）や『萬葉集釋注二』（一九九六年二月二十五日、集英社発行）などに説くように、第一首三三八、第四首三四一、第七首三四四、第十首三四七、第十三首三五〇の五首が「柱」となり、その間にある二首ずつの四群が「襖」の関係で、[注1]「四群と五首とは、相互に繋ぎとなり接着剤となりつつ、微妙にして明確な抒情の展開を完成している。」（上掲論文）。

五首の柱歌のうち、第四首三四一、第七首三四四、第十首三四七の三首は、三三八～三四一、三四一～三四四、三四四～三四七、三四七～三五〇のように、四首一組の最後の第四首であると同時に、次の四首一組の最初の第一首であるという二重の役割を担っているのである。

当面歌四五一六も、正月一日の万葉集最終歌であると同時に、来る年来る年の最初に立つ歌であるという二重の役割を担っており、讃酒歌の如上の柱歌の手法と規を一にする。家持は讃酒歌の柱歌の手法を応用したものと推断できる。

b原撰万葉集五十三首本の各天皇の宮時代の歌をリンクさせるつなぎ歌の手法

家持は万葉集の最終編者として、万葉集二十巻の根幹たる原撰万葉集五十三首本（巻一・一～五三番歌）の各天皇の宮時代の歌をつなぐ歌の手法を心得ていたと思われる。原撰万葉集五十三首については、橘守部が歌の記載形式の違いに着眼して、その存在を発見する前に、家持も当然気がついていたであろう。その証左については後述する。

拙論「原撰万葉集五十三首本と伊勢神宮」（国文学論考第五十九号、二〇二三年三月、都留文科大学国文学会発行）に指摘したように、舒明天皇「高市の岡本の宮」時代の歌（二～六番歌）と皇極天皇「明日香の川原の宮」時代の歌（七番歌）を「讃岐の安益の郡に幸す時に、軍王が山を見て作る歌」（五～六番歌）がつなぎ、皇極天皇「明日香の川原の宮」時代の歌（七番歌）と斉明天皇「後の岡本の宮」時代の歌（八～一五番歌）を額田王の七番歌がつなぎ、斉明天皇の「後の岡本の宮」時代の歌（八～一五番歌）と天智天皇「近江の大津の宮」時代の歌（一六～二一番歌）を「中大兄近江の宮に天の下知らしめす天皇の三山の歌」（一三～一五番歌）がつなぎ、天智天皇の「近江の大津の宮」時代の歌（一六～二一番歌）と天武天皇「明日香の清御原の宮」時代の歌（二二～二七番歌）を額田王と大海人皇子の二〇～二一番歌がつなぎ、さらに天武天皇の「明日香の清御原の宮」時代の歌（二二～二七番歌）と持統天皇「藤原の宮」時代の歌（二八～五三番歌）を、天武天皇の二七番歌と持統天皇の二八番歌が双方から緊密につないでいる。

家持は、原撰万葉集五十三首本すなわち万葉集全体の根幹部の舒明天皇から持統天皇に至るまでの各天皇の宮時代の歌をつなぐつなぎ歌の手法を心得ており、その手法を、万葉集最終四五一六番歌に応用したものと考えられるのである。

五、原撰万葉集五十三首本を意識しての四五一六番歌

a 雄略天皇御製歌と四五一六番歌

万葉集の最後に置かれて、来る年来る年の吉事の継起を強く祈願する歌となった四五一六番歌は、契沖『万葉代匠記』精撰本に説くように、一番歌の雄略天皇御製結婚予祝歌と響き合っている。結婚は吉事の最重要素である。

雄略御製歌が春の生命力と愛の情熱に満ち、明るい光と新緑に彩られているのに対し、大伴家持による万葉集最終歌は、降る雪の清らかな白一色に彩られている（前掲拙著『テーマ別万葉集』第一章「万葉集の名義――永遠の和歌集」三頁脚注）。

万葉集の最初の巻一・一番歌の作者が雄略天皇（大泊瀬稚武天皇）であり、最終四五一六番歌の作者が大伴宿禰家持であるという人物の対応には、雄略天皇の王権を、武を主にして支えた人物の一人が大連（大和朝廷における最高執政官の称号）[注2]の大伴連室屋であることから（『日本書紀』雄略天皇即位前紀など）、それ以降、武を主にして長く朝廷に仕えてきた大伴氏の長たる家持の自負が読みとれる（前掲拙著『テーマ別万葉集』第十五章「万葉の祈り―万葉の正月」四〇九頁脚注）。

家持が万葉集二十巻の根幹部である原撰万葉集五十三首本（巻一・一～五三番歌）の存在を心得ていたであろうことは上述したが、雄略天皇御製歌（一番歌）への叙上の意識も、原撰万葉集五十三首本の存在を意識してのことである（後に詳述）。

b 正月一日と持統天皇即位日

万葉集最終歌四五一六が正月一日の歌である点にも、原撰万葉集の影響があろう。

原撰万葉集五十三首本は、天武・持統万葉集と換言できる。その企画者は天武天皇であり、その編纂の中心が持統天皇であったと推定される。そして、天武天皇御製歌二五～二七番歌と持統天皇御製歌二八番歌が原撰万葉集五十三首本の核心部を成しているのである（以上、拙論「持統天皇御製歌と原撰『万葉集』」都留文科大学大学院紀要第二十二集、二〇一八年三月発行、先掲拙論「原撰万葉集五十三首本と伊勢神宮」）。

してみると、万葉集最終歌四五一六が春正月一日の歌である点には、原撰万葉集の中心に立つ持統天皇の即位式の日の春正月一日の影響が看取されるのである。

天武天皇崩御ののち、持統天皇は即位式を挙げずに政務を摂ってきたが（稱制）、持統四年（六九〇）春正月一日に即位式を挙げて即位した。『日本書紀』持統天皇四年春正月一日条には、次のように記している（本文は、日本古典文学大系『日本書紀下』一九六五年七月五日、岩波書店発行に拠る）。「吉（善）事」と同音の「壽詞」の言葉も見られる。

> 四年の春正月の戊寅の朔に、物部麻呂朝臣、大盾を樹つ。神祇伯中臣大嶋朝臣、天神壽詞読む。畢りて忌部宿禰色夫知、神璽の劒・鏡を皇后に奉上る。皇后、即天皇位す。公卿百寮、羅列りて匝く拜みたてまつりて、手拍つ。

家持は持統天皇への敬意から、持統天皇即位の持統四年（六九〇）

春正月一日と響き合わせる意図をもって、万葉集最終歌を天平宝字三年（七五九）春正月一日の四五一六番歌としたことが考えられるのである。持統天皇即位の正月一日を意識した蓋然性は高いと思われる。他のことの影響については注6を参照されたい。

c 万葉集二十巻構造と伊勢神宮遷宮年数二十

万葉集二十巻構造について、なぜ二十巻なのか、いまだ解明されていない。二十巻は、十六巻（巻一～十六）＋大伴家持歌日誌四巻（巻十七～二十）の二部構造の合体となっているが、家持が自身の歌日誌部分をなぜ四巻とし、全体を二十巻としたのか、明らかでない。しかし、前掲拙論「原撰万葉集五十三首本と伊勢神宮」に論述、指摘したように、原撰万葉集五十三首本が天武天皇と持統天皇の伊勢神宮に対する崇敬意識によって形成されていることが深く関わっていると考えられる。

万葉集二十巻構造の「二十」という数字は、天武天皇が定めたといわれる二十年に一度の式年遷宮、持統天皇即位の持統四年（六九〇）に行って以来の式年遷宮[注3]のその二十という数字と関わると考えられるのである。

『伊勢神宮』（昭和六十一年十一月二十一日、共同通信社発行）の「神宮の建築と式年遷宮」の「なぜ遷宮は二十年で」の節に

掘っ立て柱に萱の屋根で素木の御殿は十年もすれば部分的には少々傷み、清々しい美しさも失われてくるが、まだまだ耐久性はある。しかし尊厳な姿を保つには二十年が限度である。十年一昔という。そして二十年は時代の大きな区切りであり、世代の一区切りでもある。

万葉集も勅撰和歌集も二十巻であり、古代は二十という数が区切りの数とされ、暦学においても元旦と立春が重なるのは約二十年に一度という説もある。

と記し、万葉集の二十巻にも言及している。が、万葉集の巻数の二十と式年遷宮の年数二十はそれぞれ「区切り」の数字として捉えられており[注4]、両者の直接的有機的関わりについてはまったく触れていない。

前掲拙論「原撰万葉集五十三首本と伊勢神宮」に論述したように、万葉集の原撰部（巻一・一～五三番歌）は、天武天皇と持統天皇の伊勢神宮への崇敬意識によって編まれており、そのことを心得ていた家持が遷宮の年数二十を意識して、万葉集を二十巻としたものと考えられるのである。ちなみに、聖武天皇天平十九年（七四七）に、内宮第四回式年遷宮が行われたという（上掲『伊勢神宮』「神宮年表抄」に拠る）。それは家持越中国守時代のことであるが、家持はその年の五月から九月にかけての数カ月を税帳使として帰京しており、式年遷宮のことを聞く機会があったであろう。

家持は天平十二年（七四〇）十月の聖武天皇伊勢国行幸に内舎人として供奉し、河口行宮にて歌を詠んでいる（巻六・一〇二九番歌）。『続日本紀』（新日本古典文学大系『続日本紀二』一九九〇年九月二七日、岩波書店発行に拠る）を検するに、天平十二年の十月二十九日に、「伊勢国に行幸したまふ。」とあり、十一月二日に、「伊勢国壱志郡河口頓宮に到る。これを関宮と謂ふ。」、三日には、

少納言従五位下大井王并せて中臣・忌部らを遣して、幣帛を

大神宮に奉る。車駕、関宮に停り御しますこと十箇日。

と記す。家持、時に二十三歳。この時点においてすでに伊勢神宮に対する崇敬意識があったことは確実である。

式年遷宮についての見解の中に、目を引く見解がある。清水潔氏「伊勢の神宮　清浄の思想」（『伊勢神宮　悠久の歴史と祭り』二〇一三年五月十九日、平凡社発行）には、次のように述べている。

式年遷宮は、天武天皇の叡虜を体して、持統天皇四年（六九〇）に内宮の、同六年に外宮の第一回式年遷宮が行われた。それまでは、破損するにしたがって修理するのが例であった。

掘立式で萱葺の屋根をもつ社殿は、そのままでは永く清浄な社殿を保つことはできない。祭祀に厳しく求められるのは清浄性である。清らかな社殿、清らかな神餞、清らかな調度、装束、清らかな神宝、それは真新しいことと同義でもある。式年遷宮は部分的な修復ではなく、一切を新しくして、徹底した清浄性を実現し、そこに御神体をお遷ししてお祭りし、神威の更新を願い、国家無窮の弥栄を祈る。それは、神宮祭祀の原点の二十年ごとの大いなる甦りである。

ここに、皇祖神をお祀りする神宮の式年遷宮制を採用された思想的基盤があったのではないか。天武天皇朝には国家の永遠性や清浄性を志向した他の施策も少なくないのである。

肯定すべき見解である。また、同書収録の吉川竜実氏「式年遷宮――原点回帰への大いなる営み」には、諸説を紹介後に、「すべての説の根底には、常に瑞々しく清らかであることを尊ぶ『常若』の思想と『原点回帰』の信仰とが流れているのは重要である。」と述べ、建築学者稲垣栄三氏の次のような見解を紹介している。

祭が繰返し行われる限り、過ぎ去ることのない起源の時がそのつど再現される。これこそこの制度を創始した人の求めたものである。（略）あらゆる時代に繰返された式年遷宮への参加は、その時代のもつ固有の時間からの脱出である。それはルーマニアの宗教学者ミルチャ・エリアーデが〈永遠性に属する太初の時への回帰〉とも〈永遠の反復〉とも呼んだ構造と同じ性格をもつものである。

前掲拙論に述べたように、原撰万葉集五十三首本と伊勢神宮との関わりは、清（浄）く明き世界を尊重した天武天皇の思想の具現である。その原撰万葉集の最初に御製歌が据えられた雄略天皇は、伊勢神宮と関わる天皇であった（『日本書紀』雄略天皇元年三月是の月条）。

家持が天武天皇・持統天皇の伊勢神宮に対する崇敬意識によって形成された原撰万葉集五十三首本（巻一・一～五三番歌）とその最初の雄略天皇御製歌を意識することによって、四五一六番歌は伊勢神宮に対する崇敬意識に支えられた再生と永遠の吉事祈願の歌となったのである。

六、四五一六番歌と万葉集二十巻編纂完成の時期

家持は原撰万葉集五十三首（巻一・一～五三番歌）を意識し、その最初の雄略天皇御製歌と響き合う歌を万葉集の最後に据える意図を、いつごろ抱いたのか。思うに、その意図は、家持が自身の「霍公鳥を感づる情に飽かずして、懐を述べて作る歌一首幷せて短歌」（巻十九・四一八〇～四一八三番歌）の長歌四一八〇の歌い起こしに、原撰万葉集五十三首の中心を天武天皇御製歌二五～二七とともに成す持統天皇御製歌二八の上二句「春過ぎて夏来向かへば」と詠んだ天平勝宝二年（七五〇）四月三日の頃には確実に存したと推定される。

響き合いに対する意図は、家持歌日誌の巻十七冒頭部の天平十八年正月肆宴の雪賦応詔歌群（三九二二～三九二六番歌）に対しても存し、上述の雄略御製歌との響き合いと二重の響き合いを意図していたと考えられる。

家持が自身の代表作と自覚していたと覚しい春愁絶唱三首（巻十九・四二九〇～四二九二番歌。その左注参照）を万葉集の最終歌群としなかったのは、その三首では、如上の二重の響き合いをかなえることができないからである。ここに、巻二十形成の旅が始まる要因がある。二重の響き合いをかなえる歌の創出の旅。

そして、天平勝宝三年（七五九）正月一日に吉事祈願の歌四五一六を詠み成すことができた。この歌を編纂上万葉集の最後に置いた時、永遠の吉事祈願の歌となり、巻十七冒頭部の天平十八年正月肆宴雪賦応詔歌群（三九二二～三九二六）と響き合うと同時に、巻一の最初、巻一の原撰部五十三首の最初に立つ雄略天皇御製歌と響き合う歌となったのである。[注6] その響き合いの達成に、最終編者大伴家持は幸福を感じたであろう。

してみると、家持の手による万葉集二十巻編纂の完成の時期として、この天平宝字三年（七五九）がクローズアップされるのである。

天平宝字三年（七五九）の歌は一年の最初正月一日の四五一六番歌の一首のみ。それ以降の歌はない。この四五一六番歌に家持の格別の思い入れがあったと見なければならない。その格別の思いは、この歌の配置をもって万葉集の編纂を成し遂げるという思いであったのである。

この見方を支持する歴史的事実がある。それは、天平宝字三年の前年天平宝字二年（七五八）と、翌天平宝字四年（七六〇）の次のような歴史的事実である。

家持が六月十六日に因幡国守に任命された天平宝字二年（七五八）の八月一日に、孝謙天皇の譲位を受けて、皇太子大炊王が淳仁天皇として即位した。この八月の一日に孝謙上皇と光明皇太后の、そして九日に先帝聖武の、それぞれ美名と優れた事績を讃えて、尊号を追上した。

八月一日の孝謙上皇と光明皇太后に尊号を奉る百官の上表文中には、

伏して乞はくは、上臺は宝字称徳孝謙皇帝と称し奉り、中臺は天平応真仁正皇太后と称し奉らむことを。上天休（稿者注、天の称賛するところ、の意）に協ひて鴻名を万歳に伝へ、下人望に従ひて雅称を千秋に揚ぐ。（傍線は稿者）

とあり、九日の先帝聖武に尊号を追上する勅の中にも、

其れ洪業を揚げ奉らずは、何を以てか後世に示さむ。敬ひて旧典に依りて、追ひて尊号を上り、策して勝宝感神聖武皇帝と称し、謚して天璽国押開豊桜彦尊と称す。休名（稿者注、美名）を万代に伝へて乾坤と与に長く施し、茂実（稿者注、優れた事績）を千秋に揚げて日月と共に久しく照さしめむと欲ふ。

と記している（本文は、『続日本紀三』一九九二年一一月三〇日、岩波書店発行に拠る）。因幡国守大伴家持はこのような歴史的事実を深く心に刻みつけ、天皇をはじめとする日本国民の万代（永遠）の吉事を祈願して、万葉集最終の位置に四五一六番歌を録したものと考えられる（拙著『甲斐　万葉の歌譜』第Ⅰ部第40節「光明皇后の御歌　慈愛と慈善」の「補考」。二〇一二年九月二十八日、山梨日日新聞社発行）。

一方、当面歌四五一六が詠まれた天平宝字三年の翌天平宝字四年（七六〇）の六月七日に、光明皇太后が崩御された。聖武天皇崩御の天平勝宝八歳（七五六）五月二日から四年ほど経ってのことである。(注7)

四五一六番歌が詠まれた天平宝字三年（七五九）の前後の年の如上の歴史的事実を顧慮するならば、家持による万葉集編纂の最終時期は時代のターニングポイント（転換期）の、天平宝字三年（七五九）、または天平宝字三～四年（七五九～七六〇）と考えられる。

四五一六番歌の左注の

右の一首は、守大伴宿禰家持作る。

は、万葉集二十巻全体の最終記載であり、四五一六番歌左注であると同時に万葉集を集大成した最終編者大伴宿禰家持の署名の意味あいを持っているのである。それゆえ、「守」（因幡国守）は、万葉集二十巻を集大成した時の官職名と察せられる（前掲拙著『テーマ別万葉集』第十五章四〇九頁脚注）。

家持は最終的に万葉集二十巻を聖武天皇と光明皇后（皇太后）に捧げる心で編纂を果たしたものと考えられる。むろん、元正天皇や橘諸兄への思いも存したであろうことは、先述のように四五一六番歌と大伴家持歌日誌四巻のうちの巻十七の天平十八年正月肆宴の雪賦応詔歌群との響き合いによってうかがえる。が、万葉集二十巻となると、前者の心が後者を包括するであろう。

原撰万葉集五十三首本（巻一・一～五三番歌）は、天武天皇と持統天皇が中心となって誕生した。その天武天皇と持統天皇に、聖武天皇と光明皇后を対応させての思いが家持にはあったであろう。光明皇后が平城京に降る雪に寄せて、聖武天皇に奉った可憐な愛の歌、

我が背子と二人見ませば幾ばくかこの降る雪の嬉しくあらまし（巻八・一六五八番歌）

が家持の心に深く刻まれてあったであろう（四五一六番歌と同様、第四句に「降る雪の」の表現）。

天武天皇と持統天皇による原撰万葉集五十三首本を母体として編纂のバトンが受け継がれてきた万葉集。大伴家持は、その最後に永

遠の吉事祈願の四五一六番歌を据え、二十巻本万葉集を聖武天皇と光明皇后（皇太后）に捧げる心をもって編纂を成し遂げ、万葉集最終編者の責を果たしたのである。

（二〇二二年一一月一五日）

注

1、「襖」とも「屏風」とも喩えられよう。「屏風」は「襖」を二枚ずつつないだ形で、室内装飾にも用いられた。旅人は大宰帥官邸の室内の「襖」や「屏風」の構造にヒントを得て、讃酒歌十三首の構成を考案したものと考えられる。その「襖」や「屏風」には、三四〇番歌にうたわれている竹林の七賢人などの絵が描かれていたであろう。また、三四四番歌の「猿」や三四八番歌の「鳥」なども描かれていた可能性が高い。旅人は襖絵や屏風絵に讃酒歌の発想を得たと考えられる。

2、先掲『日本書紀上』補注14―四。大連の大伴氏は物部氏とともに、「朝廷で軍事的指揮者としての職掌を担当した伴造の家柄であ」り、物部氏とともに「大連となって大和朝廷の最高執政官の役割を果たしたのは、この期における対内的・対外的な政治情勢と関連しているのであろう。」とある。

3、平安時代末期成立の『大神宮諸雑事記』という史料に、神宮の遷宮祭祀の創始が持統天皇即位の持統四年（六九〇）と伝えるに拠る（新谷尚紀『伊勢神宮と三種の神器　古代日本の祭祀と天皇』〈二〇一三年十一月一〇日、講談社発行〉の「第一章1（4）」など）。

4、同様の考えは、早くに桜井勝之進『伊勢の大神の宮』（昭和四十八年三月二十五日、堀書店発行）の「十三　式年遷宮」の「神威更新」の項にあり、「鹿島香取や住吉などは伊勢と同じく二十年となっているが、これはこれで、万葉集二十巻、弘仁式二十巻というように二十をひと区切りとする観念があったからであろう。」「万葉集二十巻にならって古今和歌集も二十巻にまとめられると、次々に編さんされる勅撰和歌集はすべて二十巻でまとめられたように、一たび二十年を式年と定められると、ことに神事ともなれば、前例にそむかないことが神慮にかなうとされるから、二十年ごとには必ずご遷宮が行われる。」と記している。けれども、万葉集の巻数二十と式年遷宮の年数二十の直接的有機的関連については述べていない。

5、注3引用の新谷氏著「第一章1（5）」に、持統四年（六九〇）の第一回遷宮から延暦四年（七八五）の第六回遷宮まで、初期の遷宮が十九年間隔であったとする説を紹介している。けれども、古代ではかぞえ年のかぞえ方であり、それに拠って持統四年（六九〇）の第一回遷宮の年を一と数えれば、延暦四年（七八五）の第六回遷宮まで、二十年ごとの遷宮となる。

6、四五一六番歌の歌の響き合いについて補足したい。四五一六番歌の「降る雪」の清らかな白は、持統天皇御製歌二八の「白妙の衣」の明浄なる「白」の系譜に立つ。二八番歌の「白」は、天武天皇が理想とした「明・浄（清）」の世界観を具現する色彩である（前掲拙論「原撰万葉集五十三首本と伊勢神宮」）。その明浄なる「白」は、宮廷歌人の柿本人麻呂歌の「白雪」（巻三・二六一番歌）、笠金村の吉野讃歌の「白木綿花」（巻六・九〇九番歌）、山部赤人の富士歌の「真白」の雪（巻三・三一八

番歌）に受け継がれ、さらに大伴家持の当面歌四五一六の「降る雪」の白に受け継がれていると考えられる。明浄なる「白」の響き合いの系譜である。また、四五一六番歌の「吉（善）事」についても、持続天皇御製歌二八の直前の天武天皇御製吉野行幸歌二七「淑き人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よ良き人よく見」の形容詞と地名の「よし」とその原文の「淑」「良」「吉」「好」「芳」「四来」の特に「吉」「良」と響き合っていると考えられる。以上のこと、家持も意識していたと思われる。

7、崩御の六月七日条の光明皇太后薨伝には、

太后、仁慈にして、志、物を救ふに在り。東大寺と天下の国分寺とを創建するは、本、太后の勧めし所なり。……

とある。諸国の国分寺の総本山東大寺の盧舎那仏は、華厳経の中心存在である。その華厳経を象徴する言葉が、「一即一切、一切即一」。一に一切が含まれ、一切が一に充溢しているの意で、一と無限（永遠）との繋がりを説いたもの。

大仏鋳造の黄金が陸奥の国から産出したことを賀する巻十八・四〇九四～四〇九七番歌を成した家持が万葉集の最後に天平宝字三（七五九）年一月一日の四五一六番歌を置き、永遠の時空とリンクさせ、未来へ開いて、永遠の吉事を祈願したことには、上述の華厳思想の作用もあろう（前掲拙著『甲斐　万葉の歌譜』第一部40節）。上記四〇九四番歌に当面歌四五一六と同じ「よごと」（原文「善事」）の言葉が用いられているのも偶然ではなかろう。

（付記）

本稿と密接にかかわる稿者拙論に、四五一六番歌を『万葉集』末四巻の正月の歌との関係性から論じた「『萬葉集』末四巻の正月の歌」（都留文科大学研究紀要第46集、一九九七年三月十四日発行）があるので、参照されたい。

受領日：二〇二二年一一月二九日
受理日：二〇二二年一二月一二日